

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：25403

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2013

課題番号：20520648

研究課題名(和文) 冷戦初期における米国核政策と被爆者・ヒバクシャ情報

研究課題名(英文) U.S.Nuclear Policy and Grobal Hibakusha Information in Early Cold War Era

研究代表者

高橋 博子 (Takahashi, Hiroko)

広島市立大学・付置研究所・講師

研究者番号：00364117

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、広島・長崎で収集された被爆資料が、米国政府が冷戦政策の中でどのように利用され、いかなる核時代が作られていったのかを、近年公開された資料や広島・長崎の被爆者や核実験によるヒバクシャの証言の分析に基づいて浮き彫りにすることにある。核兵器という人類の生み出した兵器が、非人道的であるのはいままでもないことであり、本研究では、単に核兵器の開発史や核戦略史をたどるだけでなく、核兵器による被害者を視野に入れた、米国の核開発史の全体像を具体的、かつ実証的に検討した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project is to investigate how the U.S.government used atomic bomb medical records and documents collected in Hiroshima and Nagasaki to design its Cold War strategy. This project worked to reveal that the United States used the suffering of human victims of nuclear attack to facilitate its nuclear development. To achieve this goal, the project utilized important and recently declassified U.S. government documents.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ABCC 政治学 日本史 核実験 残留放射線 病理学 被爆者 西洋史

## 1. 研究開始当初の背景

1945年8月6日の広島への原爆投下直後、日本政府は「陸軍省救護調査団」を結成し、原爆投下による被害調査を開始し、被爆初期の資料の収集や記録作成を行った。1945年9月中旬文部省学術研究会議は「原子爆弾災害調査研究特別委員会」を結成して広島・長崎における原爆被害の全貌を明らかにするための調査を行った。その一方、米軍側は、まずマンハッタン管区調査団、陸軍調査団、海軍調査団、戦略爆撃調査団などいくつもの調査団を送っていたが、続いて陸海軍を統合した総合的な調査団である「原爆の効果に関する合同調査団」を組織した(『原爆被災学術資料に関する報告』、1973年、5)。米軍合同調査団の調査は1945年12月でいったん終了し、この時期までに日本人研究者によって広島・長崎で収集されたものを大量に含んだ原爆医学資料は、1946年1月に呉から米国へと船で移送された。同資料は米軍医総監局の管轄となり、嚴重に機密扱いされ、米陸軍病理学研究所に保管された。このように米側が収集した広島・長崎の被爆資料は軍事資料として扱われ、一般には情報が入手しにくい状況が続いたが、これらの資料の返還問題が1971年12月国会にて議論された。1972年2月、外務省は米政府に対して正式に返還を申し入れ、米政府はそれに応じた1973年に返還した(『原爆の記録ヒロシマ：米返還資料から』1973年)。しかしながら、この時に返還されたのは1945年に収集された被爆資料が中心であり、それ以降に収集された被爆資料および1947年に放射線の人体への長期的影響を調査するために発足したABCC(原爆傷害調査委員会)が収集した被爆資料は、いまだに返還されていない。したがって、まだ返還されていない資料も含めて、被爆資料がどのような調査によって収集されかつ核開発の中でどのように利

用されたかについての体系的な研究はまだ行われていない。

研究代表者は、とりわけ米国立公文書館での研究歴が長く、公文書館で収集した原爆関連、米原子力委員会関連資料に基づいて、博士論文「米国政府による原爆情報管理と民間防衛計画、1945年 - 1955年」(2003年3月、同志社大学)を提出した。またビキニ水爆被災について、やはり1990年代に機密解除されたばかりの米公文書を収集し、新事実を発掘し、分析してきた。その成果は『隠されたヒバクシャ：ビキニ水爆被災』(凱風社、2005年)として共著で出版した。

また平成17～19年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究(B)の助成を受け、「米公文書と被ばく者証言に基づく米核実験の史的研究：1945年 - 1963年を中心に」という課題で資料および関係者の証言収集を行ってきた。同研究の成果は科研費研究成果公開促進費の助成を受け、『封印されたヒロシマ・ナガサキ 米核実験と民間防衛計画』(凱風社、2008年)として出版した。本研究ではこの研究の蓄積の上に、被爆資料に基づいた核開発史の全体像を明らかにした。

核開発史についてはリチャード・ローズ(Richard Rhodes)による原爆開発、水爆開発に関する書『原爆から水爆へ』等が有名であるし、核実験の歴史については、バートン・ハッカー(Barton C. Hacker)による研究*Elements of Controversy: The Atomic Energy Commission and Radiation Safety in Nuclear Weapons Testing 1947-1974*があげられる。

しかし両研究とも核兵器による被害の実相に迫ってはいない。

最近の研究成果としては、世界中のヒバクシャの証言に基づいて核による被害の歴史について書かれた、豊崎博光『マーシャ

ル諸島:核の世紀 1914 - 2004』(日本図書センター、2005年)があげられる。本書のような視点で、広島・長崎の被爆者や核実験によるヒバクシャの証言を、機密解除されたばかりの資料や被爆資料に基づいて裏付けてゆく研究が必要だった。

## 2. 研究の目的

米国は日本占領直後から原爆の影響のうち残留放射線(原爆炸裂一分後から発生する放射線)の影響を過小評価・否定する公式声明を出し続けており、残留放射線の問題は重要な問題として物理学でも医学でも扱われてこなかった。その一方で、原爆による被爆者や核実験によるヒバクシャの残留放射線による被害が、より深刻であることは、原爆症認定集団訴訟の原告や核実験によるヒバクシャ側からの具体的な身体的影響をとまなう証言によって明らかになりつつある。しかしながら、物理学的・医学的研究そのものが軽視されていただけに、いわゆる従来の「科学」の名における研究の蓄積そのものが浅く、いわば科学が被爆者・ヒバクシャの具体的証言や身体的影響の説明に追いついていないのが実情である。

本研究の目的は、広島・長崎で収集された被爆資料が、米国政府が冷戦政策の中でどのように利用され、いかなる核時代が作られていったのかを、近年公開された資料や広島・長崎の被爆者や核実験によるヒバクシャの証言の分析に基づいて浮き彫りにすることにある。核兵器という人類の生み出した兵器が、非人道的であるのはいうまでもないことであり、本研究では、単に核兵器の開発史や核戦略史をたどるだけではなく、核兵器による被害者を視野に入れた、米国の核開発史の全体像を具体的、かつ実証的に検討した。

## 3. 研究の方法

研究代表者は、米国立校文書館軍事資料部門のアーキヴィストであるジョン・テイラー氏をはじめ、多くのアーキヴィストの助言の下、調査・資料収集をすすめていたが、その上で、米政府の原爆情報統制と民間防衛計画について博士論文を書き、さらに米核実験についての調査・分析を行っている。また広島市立大学広島平和研究所のプロジェクトによって、申請者が米国立公文書館で収集した米原子力委員会資料を科学者を交えて共同分析するワークショップ「1954年ビキニ核実験による被ばく状況の実相」を開催し、ビキニ水爆実験による降灰範囲が、従来知られていたよりもかなり広い範囲に広がっていた事実を究明するなど、核実験による被害の実態を明らかにしてきた。また広島平和記念資料館の委託調査で、海外に所在する被爆資料の収集のための調査を進めてきた。

その一方で核開発に関する資料の収集は最近になって利用可能になりつつある。とりわけ1990年代にエネルギー省から移管された米原子力委員会の資料が利用可能な米国立公文書館(メリーランド州)や、1947年に広島・長崎で発足した放射線の人体への長期的影響について調査していた機関であるABCC(原爆障害調査委員会)の文書を収めている米科学アカデミー文書館(ワシントンDC)さらには核実験に関連する資料を収集している核実験文書館(ネヴァダ州)での調査を行った。

このような米核開発に関する文献資料、公文書等を収集分析し、資料に基づく具体的な事例を、米核開発の全体像の中に位置づける研究を進めた。とりわけ、機密解除されたばかりの資料、情報公開請求の結果でてきた資料の分析を最優先し、当該資料がなぜ機密扱いされていたのかについても考察した。

#### 4. 研究成果

2008年7月に、科研費基盤研究C「冷戦初期における米国核政策と被爆者・ヒバクシャ情報」研究会を2回にわたって広島平和研究所にて開催し、物理学、医学の専門家を招いて、残留放射線の問題を物理学・医学・社会科学の観点から多角的に検討した。物理学では初期放射線についてはかなり精度の高い値はだせるものの、残留放射線についてはまだまだ説明できない未解明の部分が大きいことが浮き彫りになった。それに対して、実際に広島・長崎の被爆者の治療に携わる医学者の視点からは、現在物理的に充分説明できないとはいえ、あまりにも残留放射線による被爆の状況と実際に身体にあらわれる症状とが整合性があるため、むしろ科学はその開きを説明する努力をしなければならないとの指摘があった。本研究では物理学・医学・社会科学の分野を超えて、被爆者・ヒバクシャが生み出された物理学的・医学的・歴史的背景を明らかにするための重要な研究会となり、被爆者・ヒバクシャの実態をこれからも解明してゆく必要性を分野を超えて認識することができた。

原爆・核実験の放射線の影響についての情報がどのように米国政府によって統制され、また公開されてきたのかを検証し、関連映像・写真・書籍を収集した。またそうした情報統制の中、核兵器・被爆者・ヒバクシャ情報、とりわけ放射線の人体への影響に関する情報や放射性降下物に関する情報がアメリカの冷戦文化の中にどのように反映されていったのか、主に1950年代に製作された映画や文学作品を中心に検討した。収集された被爆者・ヒバクシャの実相を示す情報と、フィクションの中で描かれた核

戦争のイメージとが具体的にどのような開きがあるのかについて、2009年度に実施された第3回ヒロシマ平和映画祭と連携した。また、米国立公文書館・米科学アカデミー文書館・米軍病理学研究所で収集した米原子力委員会や原爆傷害調査委員会関連文書・写真の一部をPDFファイル化し、分析しやすい状態にした。さらに日本科学史学会の欧文誌に拙稿"One Minute after the Detonation of the Atomic Bomb : The Erased Effects of Residual Radiation" (Special Issue Beyond Differences : International Comparison on Nuclear Histories in Japan, Korea, and the United States),"が掲載された。

2011年には、1954年3月1日のビキニ環礁での米核実験で被災した第五福竜丸を初めとする米核実験によって被ばくしたマグロ漁船の乗組員の被災状況を明らかにするために、被ばく者側の証言を実験当局者である米原子力委員会の資料や日本人研究者側の資料から多角的に裏付けてゆく調査を進めた。1954年11月の日本学術会議主催の放射線の影響に関する日米会議を契機として、1954年末に厚生省はマグロ調査を終了する。本研究では、食料・水を通して入ってくる放射性物質による内部被ばくが、とりわけ日本においてどのように軽視され、現在に至っているのを、放射性降下物や内部被曝問題の専門家を矢ヶ崎克馬琉球大学名誉教授(内部被曝問題)を招いて検証した。さらに南海放送製作「わしも死の海におった」上映会を開催した。さらに、高知県太平洋核実験被災センターなど共催して「ビキニ事件の真実と福島原発被災のいま-軽視される低レベル放射線内部被曝を考える」を開催した。

2012年には、ドイツの人体への放射線被曝問題の研究者たちとともに放射線影響研究所を訪問し、広島・長崎の被爆者研究

を、内部被爆や残留放射線を重視した上で再検証するための論議を行った。また関連したシンポジウムを開催した。

また2013年3月には、明治学院大学において、講演会とシンポジウム「死の灰は消えない：ビキニ水爆被災を再考する」を共催した。研究成果としては『原子力と冷戦』(花伝者)に「第5章 封印されたビキニ水爆被災」、『日本の科学者』2013年1月号に「冷戦科学としての放射線人体影響研究 - マンハッタン計画・米原子力委員会・ABCC」と題した論文を寄稿し、ビキニ水爆被災や放射線人体影響に関する研究の成果を発表できた。また2013年に出版したロバート・ジェイコブズ著の『ドラゴン・テール：核の安全神話とアメリカの大衆文化』の監訳の際に研究成果を反映させることができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(論文)

(1) Hiroko Takahashi, "One Minute after the Detonation of the Atomic Bomb: The Erased Effects of Residual Radiation", *HISTORIA SCIENTIARUM* Vol. 19-2, (査読有) pp. 146 - 159, 2009.

(2) 高橋博子「「安全神話」はだれがつくったのか ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ」『現代思想』2011年5月号、(査読無) 114-122頁。

(3) 高橋博子「「放射線ストレス神話」「風評被害神話」はだれがつくったのか」2011年10月号、(査読無)。

(4) 高橋博子「原爆・核実験被害関係資料の現状(特集 戦争と平和のアーカイブズ)」『歴史評論』(2011年11月号) (査読有) 5 - 19頁、2011年。

(5) 高橋博子「海外被爆資料についての研究：米軍病理学研究所(AFIP)を中心に」『広島平和記念資料館資料調査研究会報告書』第8号、査読無、(43 - 56頁)2012年。

(6) 高橋博子「隠された放射性降下物の歴史」『エコクリティシズムレビュー No.6』特別寄稿論文、2013年、1 - 10頁。

(7) 高橋博子「冷戦下における放射線人体影響研究 マンハッタン計画・米原子力委員会・ABCC」『日本の科学者』(vol.48)2013年1月号、査読有、6 - 13頁。

(共著・翻訳)

(1) 高橋博子『新訂増補版 封印されたヒロシマ・ナガサキ：米核実験と民間防衛計画』凱風社、332頁、2012年。

(2) 高橋博子「封印されたビキニ水爆被災と情報コントロールされる福島第一原発事故」加藤哲郎・井川充雄編『原子力と冷戦 日本とアジアの原発導入』花伝社、2013年、129 - 140頁。

(3) ロバート・ジェイコブズ著、新田準訳、高橋博子監訳『ドラゴン・テール：核の安全神話とアメリカの大衆文化』(凱風社、2013年)311頁。

(4) 日本科学者会議編(中須賀徳行編集担当)高橋博子、イブ・ルノワール、ウラディーミル・チェルトコフ、アリソン・ロゼモンド、カツ、松崎道幸『国際原子力ムラ その形成の歴史と実態』(合同出版、2013年)144頁。

(5) 安齋育郎監修、ビキニ水爆被災事件静岡県調査研究会編集、埋田昇二、聞間元、枝村三郎、竹峰誠一郎、野口邦和、安田和也、高橋博子、沢田昭二、安齋育郎『ビキ

ニ水爆被災事件の真相 第五福竜丸ものがたり(かもがわ出版、2014年)78頁。

(学会発表)

(1) 高橋博子「グローバルヒバクシャの視点から」日本平和学会、2011年10月30日、修道大学。

(2) 高橋博子「ABCC(原爆傷害調査委員会)と被曝線量推定方式」日本アメリカ学会、2012年6月3日、名古屋大学。

(3) 高橋博子「隠された放射性降下物の歴史」エコクリティシズム学会(招待講演)、2012年8月8日。

(4) Hiroko Takahashi, "Concealed Internal Radiation from Hiroshima to Fukushima" Peace and Justice Studies Association, 2012年10月6日、Tafts University.

(5) 高橋博子「アメリカの核開発と被ばく問題」ドイツ現代史学会、2013年9月21日、福岡大学。

(6) 高橋博子「マンハッタン計画・米原子力委員会・ABCCにみる放射線人体研究」日本平和学会、2013年11月9日、明治学院大学。

(7) Hiroko Takahashi, "The Atomic Bomb Casualty Commission and the Study of Pregnant Women and Infants." Berkshire Conference on the History of Women, 2014年5月23日 University of Toronto, Canada

[雑誌論文](計7件)

[学会発表](計7件)

[図書](計5件)

[産業財産権]  
出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

6. 研究組織  
(1) 研究代表者  
(広島市立大学付置研究所講師) 高橋博子

研究者番号：00364117